村尾誠一著
『残照の中の巨樹——正徹』
新典社　二〇〇六年

本書は、室町時代に生き、市井にあって異彩を放った歌人正徹の生涯と作品を論じたものである。中世和歌の世界に対してはむろん私は門外漢でしかない。しかしながら、ふだん古代ローマの詩を読んでいる者にとって、その世界はとても興味深いのである。なぜなら、中世和歌とは、王朝以来の和歌の蓄積の上に、しかも王朝世界という和歌の現場が失われていく中で創作されるのであり、またそこでは、ある古典の作品を前提とし、その言葉を取り込む本歌取りという手法が用いられているからである。そのようにして詠まれる和歌は観念的な性格を帯びざるを得ない。そこが古代ローマの詩と共通するのである。ローマ文学はギリシア文学の模倣として始まり、ローマ詩には、古典たるギリシア詩の研究による知識が必須とされた。そして、もはやギリシアにおけるように抒情詩人が自ら竪琴を爪弾きながら聴衆の前で歌うという文化は失われ、創作は、やはり本歌取りといえるようなギリシア詩を前提とした観念的な操作によったのである。

東西の詩歌の共通性に惹かれて本書を読み出したのであるが、宮廷和歌とその伝統に関する十分な知識なしには理解がかなわない中世和歌の中でも、正徹のものは難解で聞こえているらしい。しかも何と一万余首もの歌を残しているという。加えて、本書でとくにその意義が解説されている中世和歌の転換点に位置するということからも、まさに「巨樹」というべき歌人なのである。果たしてそのような歌人の作品を少しなりとも味わい、解説を理解することができるだろうか、正直、心配のほうが先に立った。しかし、著者はこの巨樹を取り囲む森の中をあまねく案内してくれる実に親切な導き手であった。あとがきでも述べられているように、この難解ではあるが魅力に満ちた歌人を知らせる入門的書物がいまだ存在せず、その役割を果たすべきという強い思いが本書を誕生させた。その使命は十二分に達成されていることを実感した。

ただし、目指されたのはただのガイド役だけではなかった。中世和歌史を研究してきた著者にとっても、正徹は「巨大な存在」と意識され、いずれ論ずるべき課題であった。この著者をも躊躇させる難題に挑み、研究対象として正徹の姿を描き出し、その独特の魅力を生み出している作品の特質を明らかにすることが本書のもう一つの側面であった。ガイドと論考と両面を噛み合わせることに苦心があったと思われるが、それが本書に厚みを与え、一通りの解説に終わらない読み応えのあるものにしている。

巨樹にまで至る正徹の姿を浮かび上がらせるのに著者が取った方法は、まずは評伝というスタイルであった。第一章の幼少年時代から始まって、順に二〇代、三〇代と、七〇代に至るまでの正徹の伝が章を追って辿られる。そこでしばしば引

用されるのは、伝記的資料ともなりうる家集『草根集』と歌論『正徹物語』である。各章の冒頭では、これらを含めて伝記的事実を教えてくれる作品の一節が抜粋され、著者の想像を交えたかなり自由な現代語訳で掲げてある。ほかでは原文で引くべきは原文で示してあるのだが、この現代語訳が、著者によって噛み砕かれたものであるだけに、初心の者にとってはたいへん有り難く、各章の記述へと自然に引き込まれた。そこでは、膨大な作品から抽出しうる事実に推定を交えて、正徹の成長と変化、彼を取り巻く環境が可能な限り描き出されていく。その中で、読者は中世和歌の理解に必要な様々な知識を与えられることにもなる。それはたとえば、稚児文化というものの存在であったり、二条・京極・冷泉の三派に分かれた定家の家系の位置づけであったり、源氏物語の理解が和歌を詠むに必須とされたこと、等々である。王朝文化が消えていく時代に和歌が作られ論じられた場について無知であった私には、禅林という空間にあった文学的雰囲気、あるいは、将軍義持から定家の歌について下問があったときの耕雲と正徹の論争とその好学的雰囲気などの解説にとくに教えられた。

折々の正徹の風体に読者の想像を喚起していることにも、正徹の変化を具体的に跡づけようとする著者の強い意識を感じた。たとえば、一〇代の終わり奈良から京都へ帰った正徹は「成人の青年の姿であったと思われるが、その風体の想像はなかなか難問である。一応は、比較的上級の武家的な風体を想像しておきたい。」とあり、五〇代、最後の勅撰和歌集『新続古今和歌集』撰集期には「隠者歌人らしいとも言えようし、市井の歌人というイメージで捉えることもできよう。そうした歌人としていわば自転している日々を正徹は過ごしていたと言えよう。」とその姿を描く。資料によりながらも、平板な記述にはせず、正徹の姿を立体化しようとする意識が隅々に窺われる。

とりわけ著者が目を凝らしているのは、正徹ならではと言える特質がいつごろからその作品に見出されるかという点である。この探究には、一万余首が正徹の作のすべてではないことに再び驚嘆したのだが、五二歳のときに草庵が焼失し、三〇年余りためてきた二万数千首ともいう詠草を失ってしまったという事実が障害となる。しかし著者は現存作品を見据えた上で、三〇代の作品は概ね伝統的で凡庸、いまだ正徹らしさの形成途上にあり、四〇代で和歌師範として将軍家とも関わりをもち、歌人として社会的地位を確立しているが、本来晩熟の歌人であり、五〇代の不遇と『新続古今和歌集』に入集しなかった傷心を経て、六〇歳になって住吉社に奉納した百首歌に、絶望の気持ちが和歌の本意を逸脱させている例を指摘し、正徹独自の個性の表出を認めている。そして、将軍義教の専制的支配が終焉した中で、一条兼良が催した歌合に正徹が参加して詠んだ歌を取り上げ、堯孝の歌と組まれた正徹の作に対する兼良の判定などに触れながら、定家を崇拝して独自の歌風を開き、正統から逸脱した観念性の強い難解な作でありながら不思議な魅力を湛えている正徹の和歌世界が完成していることを明らかにしている。

本書ではまずは正徹の歌人としての生涯を辿ることに重点が置かれているが、このように時々に和歌が引用され正徹の特質が論じられている。そのときとりわけ著者の炯眼と適切な解説が光っているのであるが、一つ挙げれば、正徹が源氏物語を

自在に利用していることを示して取り上げた次の一首。

咲けば散る夜の間の花の夢のうちにやがてまぎれぬ峯の白雲

この歌は源氏物語の若紫巻の光源氏の歌「見ても又逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるる憂き身ともがな」の本歌取りであるばかりでなく、義母である藤壺の返歌「世語りに人や伝へんたぐひなく憂き身をさめぬ夢になしても」をも取り込んでいるとする正徹の自注に触れて、「ある意味では単純な落花の世界の背後に、これだけの濃厚な人間ドラマがあるのであり、それが透かし見えることが「幽玄」の実現なのだということになろう。…源氏物語自体が本来そうであった生々しさを削ぎ落とし、美的に観念化されて享受されていったという事情も考えるべきであろう。当然変質はともないながらも、源氏物語は正徹達の美の典拠として働いていたのである。」と述べている。テクストとテクストの交差と重なり、そこに生じる作用、多次元の空間としてのテクストという現代の新しいテクスト観をも考えさせられてたいへん興味をそそられた。

観念主義者として評されることの多い正徹であるが、狭い世界に閉じこもるのではなく、生活詩的な和歌への共感を抱いていて、自ら極めて広い範囲の事柄を詠み、毎日のように詠み続けることの大切さを説いていること、そしてそのような不断の積み重ねが正徹の独自の境地を開く基盤になっていることにも著者は注意を向けさせている。伝記的資料としてはそれら生活に即した和歌が取り上げられてきたのであるが、正徹の人生を辿り終えたのちの第八、九章では、正徹の和歌の独特の魅力と意義をより鮮明に見せている芸術的な作品という観点から、あらためて『正徹物語』と『草根集』が検討されている。ここでは、著者を惹きつけた正徹のいわく言い難い魅力が探られ、明らかにされている。

著者の指摘を二、三引いてみよう。たとえば、自讃歌である「渡りかね雲も夕をなほたどる跡なき雪の峯の梯」については、正徹自身が語る作意を読み解きながら、この難解な作品の「何かとてつもない奥行きのあるような、複雑な読後感」を正徹の捉える幽玄体の実現として解説している。また、「夕まぐれそれかと見えし面影の霞むぞ形見有明の月」では、源氏物語においてともに狂おしい恋愛をする浮舟と夕顔のそれぞれの歌との関係を指摘し、やはりここでも「王朝的な豊艶な美の抽象化」を読み取っている。あるいは、「春の夜はかりねの夢の浮き橋もみじかき雲にわたるかりがね」では、縁語の働きによって言葉を連ねる正徹の手法を教え、定家の有名な歌「春の夜の夢の浮き橋とだえして峯に別るる横雲の空」との関係を指摘し、「もともと夢と現実のあわいのような定家歌を変奏して独自の世界を形成している。」と見ている。さらには、仏教の本覚論と結びつくような歌や、禅的思考を思わせる抽象的な空間把握を示した歌もあって、「思想詩とでも言うべきものへの展開の可能性」も見出している。著者の和歌研究の蓄積は正徹の魅力をさまざまな角度から捉えることを可能にしているのである。

以上、本書の紹介に終始したが、本書がもっと広く知られてよい正徹という大きな歌人に多くの人を導く絶好の書となることは間違いないだろう。私もローマ詩との共通性ということを超えて正徹の和歌に惹かれた。

（岩崎務）